

お花摘み

ゴルフであれ、テニスであれ、マージャンであれ、どこの世界にもその世界でしか通用しない専門用語がある。登山界には、もちろん登山用語がある。

「お花摘み」とは、門外漢にはまったく通用しない登山用語中の登山用語。意味は女性の「用足し」のことである。仮に奥多摩の高水三山で登山教室を実施したとしよう。参加者は女性6人、男性2人、ぼくとサブリーダーのY子さんの10人パーティー。圧倒的に女性優位のパーティーである。女性優位のパーティーで、リーダーが頭を痛める問題の一つがトイレ。

JR青梅線軍畑駅前で参加者を確認したぼくは、なによりもまずトイレに関わる注意を一言述べる。「トイレを済ませておいて下さいネ。高水山常福院まではトイレありませんから」「途中でガマンできなくなったら、どうするんですか?」「ヤブに入って『お花摘み』して頂くことになります」、そんな質疑応答があったりする。常福院から先には御岳駅に下るまでトイレはない。高水山から下って登り返して岩茸石山、下って登り返して惣岳山。

「一本立てます」とぼく言う。一本立てるとは、登山用語で休憩のこと。高水山から惣岳山まで来れば、またまたガマンできなくなる人も出て来る。そんな一人が、「ちょっとお花摘み」と言って茂みにかくれる。「お花摘み」とは、こんな具合にやりとりされる登山用語だ。ふっとタメ息をついて、女性の用足しを呼ぶのにこんな素敵な言葉を思いついたのは、どこのどいつだろうと考えてしまうが、皆目見当もつかない。まっ、いいか…。

比較的年配者の多いぼくの教室に、過日三十代前半くらいの若い男性が参加した。ほどよい所で一本立てた。ザックを降ろし、一呼吸おいたところで件の彼が、「ちょっとお花摘みにいってきます」と声をかけ、パーティーから離れた。用を済ませて戻ってきた彼を掴まえて、「お花摘みて、女性のためだけの言葉だよ」って言ってやったときの彼の顔。目をまん丸くしてびっくりしていた。「まったく知りませんでした」…。インターネット情報だけを金科玉条にしていることの問題点がここにある。

10月11日、日和田山での講習会終了後、バスのカレー屋さん「むささび亭」に立ち寄った。2～3週間前にもヘリが飛んだとマスターのご挨拶。登山者が増えたって言うけど、分かっていない人が多いんじゃない、と指摘する。正月の西穂の遭難も同根だと思うのだが、インターネット情報は、自分に不都合な情報はインプットされないような仕組みになっているから、山の危険を伝えてくれない。幅もあり、深みもある登山用語の意味を教えてくれない。山の危険はフェイスツーフェイスでなければ学べないし、登山用語の意味もフェイスツーフェイスでなければ知ることはできない。

そうそう、男の用足しはキジ打ち。大はオオキジであり、小はコキジである。